

逆鉾

宮増作

前

ワキ 官人

シテ 里の翁

ツレ 男

後

ワキ 前に同じ

シテ 滝祭の神

地は 大和

季は 九月

ワキ次第

「大和にも織る唐錦。く。龍田の神に参らん。

詞

「そもく是は当今に仕へ奉る臣下なり。さても和州龍田の明神は。霊神にて御座候ふ程に。此度君に御暇を申し。唯今龍田に参詣仕り候。

道行

「国々の。末は七つの都路を。く。夜深く出で、淀舟や。立つ旅衣遙々と。猶雲遠き山城の。井手の下紐末かけし。跡も昔に奈良坂や。龍田の山に着きにけり。く。

シテ、ツレ
一声

「龍田川。錦織り掛く神無月。色づく秋の梢かな。

ツレ

「紅葉の色も時めきて。

二人

「錦を張れる気色かな。

シテサシ

「是は当社龍田の里に。住みて久しき者なるが。

二人

「農職ながら昔より。神前に仕へ奉り。名におふ龍田の神垣や。宮路を通ひいつとなく。頼む願ひも浅からず。恵みを千代と祈るなり。

下歌

「頃は長月廿日あまり。紅葉も徒に。唯闇の夜の錦

なり。

上歌

「神なびの。御室の岸や崩るらん。く。龍田の川

の水の色は。濁るとも隔てじな。塵に交はる神慮。

直に御陰もゝみぢ葉の。こゝは常盤の色はえて。

誓ひも絶えぬ滝祭。いたゞく神の手向かな。く。

ワキ詞

「如何に是なる火の光りについて尋ね申すべき事の候。

シテ詞

「此方の事にて候ふか何事にて候ふぞ。

ワキ

「是は此所始めて一見の者なり。宝山への道しるべし
て賜はり候へ。

シテ

「やすき間の御事。是こそ夜祭に参る者にて候へ。
御道しるべ申し候ふべし。此方へ御出で候へ。

ワキ

「あら嬉しやゝがて参らうずるにて候。

シテ

「なふく是こそ宝山にて候へ。

ワキ

「承り及びたるより神さび殊勝にこそ候へ。又日本
第一の宝の御銚を納めしは。此御山の事にて候ふ

か。

シテ「中々の事此所の御事にて候。

ワキ「さらば此山の謂を御物語り候へ。

シテ「委しく語つて聞かせ申し候ふべし。

地クリ「そもく滝祭の御神とは。即ち当社の御事なり。

昔天祖の詔。末明らかなる御国とかや。

シテサシ「こゝに第七代に当つて顕はれ給ふを。伊奘諾伊奘冊と号す。

地「時に国常立伊奘諾に託して宣はく。豊蘆原千百五種の国あり。汝よく知るべしとて。即ち天の御銚を授け給ふ。

クセ「伊奘諾伊奘冊は。天祖の御教へ。直なる道をあらためんと。天の浮橋に。二神たゞずみ給ひて。此御銚を海中に。さし下し給ひしより。御銚を改めて。天の逆銚と名づけそめ。国富み民を治め得て。二神の始めより。今の代までの宝なり。其後国土

治まりて。御代平らかになりしかば。滝祭の明神。
此御鉾を預かりて。所も普ねしや。此御山に納め
て。宝の山と号すなり。

シテ「そもく御鉾の主たりし。

地「名も潔き滝祭の。神の社は何くぞと。問へば名を
得し龍田山。紅葉の八葉も。即ち鉾の刃先より。
照らす日影や紅の。光りさし下す鉾の露。天地す
なほなる事も。こゝこそ宝身は知らず。国の宝の

山高み。よくく礼し給へや。

ロンギ地

「実にや龍田の神の名の。く。宝の御鉾同じくは。
所を分きて見せ給へ。

シテ

「むつかしの旅人や。影恥かしき龍田山の。紅葉衣
の千早ぶる。神の祭早めんと。

地

「颯々の鈴の声。ていとうと打つ波の。鼓も同じ滝
祭の。神は我なりと。木綿四手を靡かし。榊葉
をうたひ夜に入りて。月の夜声もすみやかに。入

ると見えて失せにけり。分け入ると見えて失せにけり。
(中入)

ワキ歌

「御山の。柞の紅葉かたしきて。く。こゝに仮寝の枕より。音楽聞え花降りて。異香薫ずる不思議さよ。く。」

地

「楽に引かれて古鳥蘇の。舞の袖こそゆるぐなれ。」

後ジテ

「そもく是は。天の御鉾を守護し奉る。滝祭の神。和光に出で、龍田の神。」

地

「あるひは天つ御空の御鉾。」

シテ

「又は宝山俱利伽羅御嶽。」

地

「いたゞきまつれや。」

シテ

「驚かし奉れや滝祭。」

地

「柏手響く山の雲霧。晴れ行く日の光りの如くに。天の御鉾は顕はれたり。」

シテ

「そもく大日本国といつば神国たり。神は本覚真如の都を出で、和光同塵の御形。尤仏法流布の

国たるべしやな。有難や。

地「南無や帰命頂礼。大日覚王如来。

シテ「昔し伊奘諾伊奘冊の尊。此御銚をたづさへて。天の浮橋を踏み渡り給ひ。

地「即ち御銚をさし下し給ひ。青海原を。かき分けく探り給へば。銚のしたゞり凝り固まつて国となれり。

シテ「まづ淡路島。

地「紀の国伊勢島筑紫四国。総じて八つの国となつて。大八洲の国と名づけ。天地人の三才となる事も。此銚の徳なりあら有難や。

シテ「さて国々は荒島なれば。

地「さて国々は荒島なれば。さながら嶮しき蘆原なりしを。銚の手風はやてとなつて。蘆原を薙ぎ払ひ。引き捨て置けば山となりぬ。足引の山といひ。土はさながら岩が根なりしを。銚の刃先にあたり碎

けば。平らかなるを荒金の土といひ。其外東西南
北十方を治め。悪魔を退け豊蘆原の。国治まり
て。御鉾を守りの俱梨迦羅明王。この宝山に納め
奉り。毎日めぐるや日の本の。宝の山に龍田の神
は。く。御鉾を守りの神体なり。